

「笠取っ子たちの学び」

～気付きの質を高め、探究心を育てることを目指す
宇治学“笠取スタイル”の学習記録～ 2018.6

◆ 1・2年生 生活科 ◆

「よく見る」

「玄関に白い可愛い花が咲いてたね。」

「それ知ってる！」

そう言った子どもたちも、思い出して絵に描こうとするとなかなかうまくいきません。

そこでその花を摘んできて、手に取って見ました。

「花びらってこんなふうについでるんや！」

さらに、花にごめんねと言って、そうっとバラバラにしていきました。

「真ん中の黄色いところ、いっぱいあって、ひとつひとつがめっちゃちっちゃい！」

見ていたはずなのに覚えていなかったことに気づきました。

注意深く丁寧に見るには、ゆったりと根気よく向き合うことが必要になります。それだけに、細やかな観察を通して新たに何かに気づいた時、ちょっとした喜びも味わえるようです。



「角度を変えて見る」

草むらを歩いていて、

「みんなそこで立ち止まって、真下を見てごらん。」

と声をかけました。

見下ろすとかわいい葉がいくつもこちらを見上げています。

「今度はしゃがんで頭を下げた横から見てごらん。」

すると、密集したオオバコの仲間が穂を伸ばしている様子が見えました。まるで小さな竹林のような光景なのですが、上から見たときにはまったく気づきませんでした。

目線の高さの違いから、大人が気づきにくい低い位置の事象に子どもたちが気づくことはよくあります。



「辺りも一緒に見る」

川べりの石垣のすき間から可愛いカエデが生えていました。

「これって、カエデやね。なんでこんなところに生えてるんやろ。」

私たちの身のまわりには、こうしたすき間から生え、暮らしている植物があります。でも、どうしてそこで暮らすことになったのか、どうしてそこに根を張ることになったのかということに目を向け、そのことを面白いこと、不思議なこととして受け止めると、周囲の環境を見る目が変わってきます。

「まわりもよく見てごらん。」

「あっ、あそこにカエデの木がある！」

「きっとあのカエデの木の根がこっちに伸びてきて、この下を通過して、それでここから枝が出てきたのと同じやろか。」

「あのカエデのタネがこっちに飛んできて…。」

部分や小さな事象をじっくり見るだけではなく、見る範囲を広げて辺りも一緒に見ることで、周囲とのつながりを全体的な枠の中で考えることができそうです。



「時間が経ってから見る」



雨の日、カエデの木の下に入りました。

「ここ、雨に濡れへんね」

「なんで濡れへんのやろね」

「だって、葉があるもん」

カエデの木が、大きな雨傘になっていました。

晴れの日、同じカエデの木の下に入りました。

「ああ、涼しい！ やっぱり陰は涼しいわ」

「なんで陰になってるんやろね」

「だって、葉があるもん」

カエデの木が、大きな日傘になっていました。

雨の日にかエデの木の下から見上げると、どんよりとした灰色の雨雲は見えませんでした。

晴れの日、青空も太陽も見えませんでした。

時間が経ってから同じところを見てみると、また何か少し違ったことを感じたり気づいたりすることがあります。

低学年の生活科では、身近な自然や文化と触れ合う中で、様々な不思議や驚きと出会うことを大切にしています。そのときに必要な「観る目」もどんどん鋭く、優しく、そして温かくなるような学習活動を進めていきます。